

寄生虫文化と20世紀初頭の駆虫薬

内野 花

古来、ひとびとは体内には「虫」が存在し、その「虫」が暴れると疾病が発生したり、感情が起伏したりすると信じていた。「三戸九虫」の思想である。なかには、実際に存在する回虫や蟯虫、条虫などの寄生虫はもちろん、想像上の「虫」もあった。幼子が泣きやまないときは、「疳の虫」が身体の中を這っているからであり、何か悪い予感がする時や不安な時に「虫の知らせ」だと感じた経験をお持ちの方もいるだろう。庚申信仰で知られる三戸の思想と相俟って、「虫」はひとびととともに暮らしてきたのである。事実、そうした空想上の「虫」は絵画に描かれたのであり、色鮮やかな虫たちは寄生先を求めて今にも紙上から飛びだしそうである¹。

ヒトに寄生する虫の代表格として、回虫・蟯虫・条虫がある。これら寄生虫は周知の通り、経口感染する。人糞を肥料とした農業の普及や、手洗いの不徹底、魚介類の生食などにより、寄生虫は広くひとびとの身体に入ったのである。また、医書²や文学作品³などにも寄生虫に関する記述があることから、寄生虫への対処に苦労していた様子を読み取ることができる。

さて、この寄生虫であるが、なかでも回虫は日本ではごく最近まで、大半の国民の体内に存在していた。主要因は、人糞を肥料とした農作物にあった。もちろん、寄生虫の類いは熱に弱く、加熱処理することで死滅する。第二次世界大戦以降バブル成長期までは、生野菜を食べる習慣は現在と比べると少なく、外食時にカツフライなどの付け合わせとしてでてくる千切りキャベツなどのサラダ程度だったが、漬け物や酢の物は頻繁に食べていた。その間、農薬や化学肥料が開発・改良され、駆虫剤の改良もすすむと同時に、「衛生」概念がひとびとの間に浸透、さらには農作業が機械化・効率化していったことで、回虫保有者は減少した。しかし、過度の農薬・化学肥料に対する反対や「ナチュラル志向」が強まるにつれ、人糞肥料による農業への揺り戻しがおこり、生野菜の食習慣が一般化し

ていた現代人の体内に、回虫はこっそりと「戻り」かけていた時期もある。大きな揺り戻しもおさまった現在、やはり保有者は非常に少なくなったと言える。では、医薬の進展によってさまざまな駆虫薬が開発される以前、ひとびとは寄生虫をどのように捉え、またどのような方法で駆虫していたのであろうか。

7世紀初頭の中国・巢元方が記した『諸病源候論』巻18に、

九虫者、一曰伏虫、長四分。二曰蛔虫、長一尺。三曰白虫、長一寸。四曰肉虫、状如爛杏。五曰肺虫、状如蚕。六曰胃虫、状如蝦蟇。七曰弱虫、状如瓜瓣。八曰赤虫、状如生肉。九曰蟯虫、至細微、形如菜虫。

とあり、当時は9種類の「寄生虫」が存在すると考えられていた。この記述は日本の医書⁴にも継承されており、この9種類の「寄生虫」と、人の罪過や悪事を天帝に報告するという「三戸」が信じられていたのである。当然のことながら、存在する寄生虫と想像上の「寄生虫」や「三戸」を退治するため、ひとびとはさまざまな薬を試しては、効能の有無を明らかにしていった。16世紀の薬学者・李時珍の大著『本草綱目』にも、諸虫の項に、どんな薬がどの「虫」に有効なのかについて、記されている。そこには、実在の蛔虫（回虫）や蟯虫、寸白（条虫の一種、サナダムシのこと）についてはもちろんのこと、想像上の「三戸」や「疳虫」などにも効く薬が90種余り載っており、その種類の多さからもひとびとの生活と寄生虫が非常に密な関係にあったことがうかがえる。

近年の駆虫剤としては、製薬メーカーから各種駆虫剤が開発・販売されているが、なかでも



写真1 海人草

藤沢友吉商店（のちの藤沢薬品工業、現・アステラス製薬および第一三共ヘルスケア）が大正期に販売し、現在まで改良を経ながら続いているマク

ニンがよく知られている。マクニンはその苦味ゆえに小児が敬遠したため、糖衣錠やゼリー（水飴）状のものも販売されており、贈答品としても使用されていたことが昭和初期の新聞広告^vからわかる。また、このマクニンに類似した「マクノール」を製造・販売していた製薬会社もあった^{vi}という。マクニン・マクノールともに、開発・発売当初の原料や経緯については、残念ながら資料が残っていないため不明だが、日本では紅藻の海人草（マクリ・写真1）が駆虫薬として古くから使用されてきたこと、創業者・藤沢友吉が薬種商であったこと、また大正14（1925）年に「藤海人草」（「藤山印カット海人草」）として海人草が販売されていたこと、昭和3（1928）年の新聞広告^{vii}に「サントニンを凌ぐ」「蛔虫駆除薬マクニンが主薬」とあること、昭和27（1952）年に、海人草と輸入サントニンを主原料とした「マクニンS」が発売されたことなどから、海人草をはじめとする生薬が原料であったと考えられる。

そのマクノール錠が関西大学博物館に収蔵されている（写真2）。直径10mm、最長60mmの小さなガラス管に、融解して一部再結晶化した黒褐色の錠剤（直径約7.0mm、厚さ約3.0mm）が3錠残っている（写真3）。ガラス瓶には、「虫下シ」「憫苦寧爾 マクノール錠 12錠入」「製造元 大和産業株式会社薬品部 神戸市外本山村小路大町十三」のシールが貼られており、小さなコルク片で蓋をされている。収蔵当初よりガラス瓶は損傷していたが、現存の錠剤の1つあたりの大きさから、おそらく全長70mm程度の小瓶だったと推察される。



写真2・3 関西大学博物館所蔵のマクノール錠

この錠剤の来歴だが、東洋学者として著名な内藤湖南（1866-1934）の欧州旅行時に持参した鞆のなかから発見された。湖南は中国や朝鮮半島への海外学術調査へ何度も赴いているが、一度だけ欧州へ赴いている。大正13（1924）年7月から翌14（1925）年2月にかけてである。いつ購入されたか、いつ使用したのかについて

は不明だが、出発前年の春3月に胆石症による胆嚢摘出手術を受け、体調の思わしくなかった湖南にとって、寄生虫は是が非でも避けたいものであったのだろう。

マクノール錠の含有成分であるが、含有可能性の高い江戸期から昭和期にかけて駆虫薬として多用されていた生薬（海人草・使君子・柘榴実皮・艾葉・桂皮）の含有有無分析を、名古屋市立大学薬学研究科准教授の牧野利明氏に依頼した。薄層クロマトグラフィー（TLC）による生薬確認試験をしていただいた結果、高極性の化合物は含有されているようだが、どの生薬も検出されなかった。低分子有機化合物の含有は見込めない分析結果だったが、江戸時代後期に記された『秘伝大人小児衛生論』^{viii}や『蔓難録』などに、海人草^{ix}をはじめ、檳榔子や半夏、茯苓など多様な生薬をあわせた駆虫薬が記載されていることや、80年以上前に製造された錠剤で酸化が進んでいることをかかると、生薬の含有を完全には否定できない。

明治7（1874）年の医制発布による西洋医学教育への移行や社会生活の変化によって庶民生活から縁遠くなった生薬だが、マクニン錠やマクノール錠、その他の薬剤に関する資料が発見・分析がすすめば、20世紀初頭の生薬利用の実態をさぐる一端となる。歴史学と薬学のさらなる共同研究の進展が望まれる。

【付記】本稿は、平成23年度笹川科学研究助成（人文分野）「ベトナム芳香性薬物の史的的研究」（研究番号23-111）の研究成果の一環である。

- i 鍼師・茨木元行が永禄11（1568）年に記した「針聞書」（九州国立博物館所蔵）が著名である。
- ii 『黄帝内経』（靈樞・上膈）や『ヒポクラテス全集』（疾病について第4・第23章）、『スシュルタ本集』（補遺・第54章内臓寄生蟲病治療法）などに体内の寄生虫や寄生虫に起因する疾病についての記述がある。また、享和2（1802）年、柘植彰常がわが国最初の回虫病専門書『蔓難録』を著した。
- iii 『今昔物語集』（巻24第7典薬寮に行きて病をなほしたる女の話）に寸白治療の記述がある。
- iv 本郷正豊『鍼灸重宝記』（享保3（1718）年）
- v 『大阪毎日新聞』（昭和2年7月26日5面）
- vi 『台湾日日新聞』（昭和16年8月18日「台湾物価調整の諸問題」）
- vii 『大阪毎日新聞』（昭和3年4月26日12面）
- viii 寛政7（1795）年に本井了承が著した養生書である。
- ix 『蔓難録』には「鷓鴣菜」と記載されている。

大阪大学コミュニケーション・デザインセンター特任講師